

EurekaXIV

六年制通信 No.19 令和8年9月25日(金)号

剣豪の指摘

昨年の12月14日に職員室で「今日は赤穂浪士の討ち入りの日やね」と言ったら、若い先生方が何ですかそれ、みたいな顔をしていたので非常なショックを受けたのですが、考えてみれば昔（私の子どもの頃）は年末には必ず「忠臣蔵」がテレビでやっていたし、今の子は知らないでしょうがテレビのチャンネル権というのがありまして、それはちゃんと家長たる父親のものでしたから、子どもには全く興味のない時代劇を無理やり観せられて育ったのでした。ですから、知らず知らずのうちに赤穂浪士の討ち入りも主要人物である大石内蔵助や吉良上野介、浅野内匠頭、堀部安兵衛、清水一学などの名も、演じた役者も彼らの織り成す物語の数々も覚えてしまいました。昔の時代劇の役者は皆上手でしたね。お姫様役も上品だし。私事ですが、誕生日が討ち入りの前日にして、「忠臣蔵」の物語で言えば名場面の一つ「南部坂の別れ」の日なのですが、これももう今は通じませんね。もちろん、私も父の世代、祖父の世代が当たり前に知っていたことを知らずにいたはずですから、若い人たちのことを責める気はありません。君たち、忠臣蔵のことを知りたいなら保護者の方、というか祖父母に聞いてみて下さい。きっと喜んで話してくれますよ。（ただし最後まで聞いてあげなさいよ！）

忠臣蔵の物語は江戸時代、五代将軍綱吉の元禄時代の話です。このあたりの物語に馴染みのない世代に昔々の剣豪の話など、全く興味がないかもしれませんね。そもそも剣豪、つまり剣の達人ですが、かろうじて宮本武蔵くらいかな、君たちが名前を聞いたことがあるのは。今思い出しました。もう十年以上前でしょうか、NHKドラマで塚原ト伝をやっていました。主人公のト伝を演じたのは、今VIVANTで主演を務めている堺雅人さんです。この人は室町時代の、天下無双と称された剣豪です。

その塚原ト伝と弟子との会話を今回は紹介しようと思います。

塚原ト伝の所に弟子入り志願の剣客が来た。ト伝は入門を許した。二人の間に以下の会話がなされた記録（『仏教法話大事典』）にあるようです。

弟子：「先生、入門を許された上は一生懸命修行いたします。何年くらいで免許皆伝を頂けますでしょうか」

ト伝：「そうだな、お前はなかなかの腕前だから五年くらいかな」

弟子：「五年ですか…。では、寝食を忘れて修行に打ち込みます。それだと何年くらいで免許皆伝を頂けますでしょうか」

ト伝：「十年かかる」

弟子：「…!? い、いや、ではもう私は死に物狂いで修行いたします。それだと何年か

かるでしょうか」

ト伝：「お前さん、死に物狂いでやれば、一生かかっても免許皆伝とはならんぞ」

これだけの会話なのですが、君たち、妙に感じませんでしたか。免許皆伝とは、その道の全てを修得した証のことです。これを得るために一生懸命に修行して五年、寝食を忘れて修行をすれば五年より短くなるかと思いきや十年、死に物狂いなら一生かかっても無理。これでは話がおかしいではないか、そう思いませでしたか。普通に修行しては何年かかっても物にならない、寝食忘れて稽古せよ、これが師匠が弟子に言う普通の言葉のような気がします。では、なぜ塚原は弟子に「死に物狂いなら一生かかっても無理」などと言ったのでしょうか。塚原の言葉は間違っているのでしょうか。

私たちは「一生懸命やったのにできなかった、失敗した」という言葉を不思議とは思いません。よくあることだと思っているはずですが。しかし塚原は「一生懸命やったから失敗することがある」と言っているわけです。一生懸命に取り組むというのはベストを尽くすということです。私は前回、ベストを尽くすことの意義を説明しました。では、塚原はベストを尽くすことを否定しているのでしょうか。私はそうではないと思います。修行にはもっと大切な指標があると言っているのだと思います。それはおそらく「継続」です。継続できないような取り組みは失敗のもとだと、そう塚原は言っているのです。寝食を忘れて、死に物狂いで、そういった苛烈な言葉は「一時の力」を表すには適切ですが「継続」には向かない、だから「継続する力」こそが免許皆伝への早道である、彼はそう言いたかったのではないかと思います。皆さんどう思いますか。

今週のおすすめ

・山本周五郎 『その木戸を通して』 (新潮文庫『おさん』に収録)

山本周五郎と言えば、大河ドラマにもなった代表作『樅ノ木は残った』や『さぶ』でしょうが、こんな不思議な短編も書いているのですよ、というのが『その木戸を通して』です。これも映画やドラマになっているのですが、私はまだ観ていません。

平松正四郎と城代家老加島の娘との縁談が進んでいるところへ、ある若い娘が平松を訪ねてくる。その様子を家老の娘が見てしまう。そのあたりから物語が始まるのですが、この娘が自分の名も、なぜ平松を訪ねてきたのかも何も覚えていない。もちろん平松はこの娘を追い出そうとするのだが、家老の娘との縁談を妬んだ何者かの陰謀かとも思い、追い出した娘の後をつけると、雨の中夕闇の辻堂で途方に暮れて泣きながら「おかあさま、おかあさま」と呼ぶ姿にそのままに捨て置けず、連れて帰ってしまう。やがてこの娘、名前もわからないので「ふさ」と名づけられた娘は、皆に気に入られ正四郎と一緒にになります。女の子も生まれ幸せを享受しながらも、正四郎はいつかふさが何もかも思い出して去っていくのではないかと恐れている。ときどき何かを思い出したようなふさの姿に恐怖しながらも、いっそすべてを思い出せばいいと記憶を取り戻す手助けのようなこともしてしまう。そして、ふさが「あそこに木戸があって…」と言えば、正四郎が「その木戸の向こうには何があるのだ」という会話の後、ふさは…。と、まあ、一体何だったのかがわからないまま物語は幕を閉じるのでした。

BGMは サザンオールスターズの *TSUNAMI* でした…。